

グローバル・ショックと日本経済： 1990年代の構造変化

大阪大学大学院 新開潤一

本稿は、外国の景気変動や為替レートの変化といったグローバル・ショックが日本経済に与える効果を構造 VAR モデルを用いて分析し、それらのショックが日本経済に波及するメカニズムにどのような構造変化が生じたのかを明らかにする。通常、外国の景気後退や円高は日本経済にマイナスの効果をもたらすと考えられるが、近年議論されている米国景気のスピルオーバー効果の弱体化や為替レートの実体経済に対する影響力低下は、日本経済が以前ほど外部ショックに対して影響を受けなくなっていることを示唆している。実際、本稿の結果でも、日本経済の波及メカニズムに構造変化が生じており、外部からのショックに対する反応が 80 年代とは異なっている。すなわち、90 年代に入ると、外国の景気変動のスピルオーバー効果および為替レート変動の効果が小さくなっており、地域別では、米国・EU からのスピルオーバー効果が小さくなる一方、東アジアからの同効果が大きくなっていることが確かめられた。